

岡倉天心のビジョンと変化する世界の現実

タノン・ビダヤ

ご来賓およびご列席の皆さま

最初に、日本とアジアに対する岡倉天心（覺三）の貢献についての今回の重要なシンポジウムにお招きいただいたことを心より感謝申し上げます。

私は幸運にも、貴国文部省の奨学生として横浜国立大学に留学した経験を持っています。1965年4月初めに来日した際、冷たい小雨が降るなか、駒場留学生会館の満開の桜に迎えられたことを鮮明に覚えています。到着後、すべての外国人奨学生は数週間のオリエンテーション・プログラムに参加しました。私は能や歌舞伎、茶の湯に招待されましたが、アジアの文化を精緻化した日本流の洗練さは理解しがたいものでした。母国タイの伝統舞踊は動きが速く活気にあふれているため、これらの伝統芸能は、たんに体の動きを機械的に表現した、生気のないものに見えたのです。

それから5年、本来の学業をこなすだけで精いっぱいの方は、日本の文化的発展への関心を持つには至らず、西洋化した東京や横浜の中華街にいるほうがはるかにくつろげました。正直に言うと、私は盆踊りに参加するのが好きでしたし、日劇のショーを見に行ったりもしました。

日本での学生生活は私にとって天からの授かりものでした。タイの比較的貧しい家に生まれた私は、日本流の近代化を学んだことで、母国の経済発展のあるべき姿を探りたいと思うようになりました。実際、米国で博士課程を修了した後、私はタイに戻り、『Samurai Style Management (サムライ・スタイル・マネジメント)』という、日本の経営スタイルに関するタイ語の本を発表しました。宮本武蔵の『五輪書』の骨子に倣い、日本の経営システムをタイに適した経営手法に改良して採用すべきだと提案しました。

私が実際に『葉隠』や『The Book of Tea (茶の本)』など、日本文化に関する書物を読むチャンスを得たのは2007年、横浜国立大学の客員教授に招かれてからでした。『葉隠』は私に武士道、すなわち真のサムライであるために実践すべきことや、「切腹」が人として崇高な行為とされた理由の根幹にある武士の魂を理解させてくれました。私は岡倉天心の芸術と文化の歴史に関する知識を語ることはできません。唯一、その日本の文化芸術への造詣の深さを評価できるのは、『茶の本』を読んだ範囲に限られます。この本を読んで、私は比類ない繊細さと哲学的深みを持つ茶道の世界にすっかり魅了されました。天心の『The Awakening of Japan (日本の目覚め)』と『The Ideals of the East (東洋の理想)』は、アジアとその一体不可分の最も重要な一部である日本の歴史についての彼の造詣の深さを示しています。天心は「アジアはひとつ」であり、軍勢力を背景とした西洋の植民地支配によって一時的に分断されたにすぎないことを西洋に示したいと考えていました。私はアジア人として、その思いを難く理解できました。天心が植民地時代のアジアに広がった西洋文化の影響を非難したのは、きわめて正当でした。

天心によると、アジアの文化的伝統は、私たちがその文化のルーツを守りながら西洋の技術をうまく取り入れる方法を会得した場合に限り、アジア諸国を結びつけるものとなります。私見では、この3冊の書物はアジアの文化的遺産の最後の継承者である日本と汎アジア主義への天心の信念を概説しています。したがって、西洋の影響によって部分的に破壊されたアジアの宝を取り戻すのは日本の責務、と考えても不思議はありません。天心によると、変化する世界とは、西洋の科学技術の適切な改良を通じてアジア流の経営スタイルを確立する日本の、そしてアジアの近代化なのです。

ここで思い出すのは、西洋と東洋の違いを概説したアーノルド・トインビーの著作です。彼は西洋は「Warm head but cool heart (温かい頭脳と冷たい心)」を持つが、東洋は「Warm heart but cool head (温かい心と冷たい頭脳)」を持つと述べました。私は、天心はその著作を通して「温かい心」という美德を強く打ち出すことにより、同じような歴史的信念

を示したと考えています。茶道や能、生け花、武士道などの多彩な禅の実践は、思いやりによって温かい心を保つため、瞑想を通して悟りの境地に近づくことを教えてくれたような気がします。

明治維新は日本の近代化にとって最も重要な改革でした。日本は強い覚悟をもって、西洋諸国と競争する方法を学びました。国全体がかつてない急激な近代化を遂げるなか、日本の精神的・宗教的信念の実践は、あらゆる分野の学者に近代的な経済・社会の発展に貢献したいという強い決意を植え付けました。この時期には他のアジアの国々にも西洋の影響が色濃く感じられました。日本やタイなどのわずかな例を除き、アジア諸国の多くが植民地となりました。タイはやむなく経済を開放し、政府の自由を得る代わりに周辺領土の一部を放出しました。ラーマ5世は優れた外交手腕を発揮し、何度も欧州諸国を訪問して君主間の友好関係を構築したため、タイは東南アジアで唯一の「中立地帯」となりました。日本は別のアプローチをとり、強力な防衛策を講じて独立を維持し、アジアで最初の経済大国へと発展しました。西洋化されたアジア人の目には、日本人の精神性と性格はきわめて洗練された複雑なものに見えます。今回のシンポジウムは、明治維新の時期における岡倉天心と彼の「平和と調和」への貢献の意義について、十分な説明と根拠を与えてくれると確信しています。

世界は二度の大戦の圧倒的恐怖とその必然的帰結として、すべての国の生活環境を破壊する経済的災禍を目の当たりにしました。西欧の軍力はアジア諸国を圧倒し、世界は両極端のイデオロギーを標榜する資本主義国と社会主義国に分断されました。このときも日本は、おそらく自らの精神性を守りながら復興を成し遂げたアジアで唯一の国となり、第二次世界大戦終結から20年足らずで先進国の仲間入りを果たしました。

ここで、最近の世界の変化について考えてみます。

この20年、私たちはさまざまな世界経済の混乱を目撃してきました。中南米の経済危機、アジア通貨危機、そして最近では米国のサブプライム危機とその後のユーロ圏危機などです。個々のケースについて述べることは控えますが、アジア通貨危機と欧米の経済危機の発生と解決の違いについて触れたいと思います。

1997年のアジア通貨危機は、タイから始まって他のASEAN諸国と韓国に波及したため、「トムヤンクン」危機と呼ばれました。欧米諸国は、すべて経済運営の失敗だとして私たちを批判し、痛みを伴う解決策を勧告しましたが、それはすでに弱体化している経済をさらに悪化させるようなものでした。その中で日本だけが「温かい心」あふれるリーダーシップを発揮し、全面的な金融・経済支援を約束してくれました。思い出すのは危機の直後、私がタイの財務大臣として、仏像だけを手に日本を訪れた日のことです。当時の福田康夫首相との朝食会では、心温まるおもてなしに胸がいっぱいになりました。私たちは、首相の父君である故福田赳夫首相と故安倍晋太郎外務大臣がASEAN諸国の発展を支援するために提案した、「心と心の触れ合う」外交政策について語り合いました。福田首相の力強い支援の約束を得て、午後の大蔵省での会議は私の人生にとって最も貴重な瞬間となりました。当時の三塚博大蔵大臣は、タイ経済の完全復活に向けた支援は日本の責務であり、日本経済はなおバブル崩壊の後遺症に苦しんでいるが、日本国民は理解するだろうと述べ、支援に取り組む姿勢を鮮明にしました。それを聞いて、私は本当にうれしかった。私は天の恵みである仏像を彼に贈ることで敬意を表し、感謝の気持ちを伝えました。奇跡というべきか、欧米諸国の懐疑的な見方に反して、多くのアジア諸国は10年足らずで完全に立ち直りました。日本政府、民間部門、そしてすべての日本の友人たちは、私たちが危機から立ち直るためにあらゆる資源を投じてくれました。タイ経済はわずか6年で正常化しました。アジアは現在、中国、インドなどの新興国とともに、最大かつ最も競争力のある生産拠点を擁する世界有数の経済圏に成長しました。「アジアはひとつ」という天心の先見的思想は、現実になろうとしているのかもしれませんが。

対照的に、欧米先進諸国の「冷たい心」は世界を最悪の方向に激変させています。私たちは今、グローバルな銀行システムの崩壊、多くの先進国における深刻な景気後退と不況、分裂含みのユーロ危機などに直面していますが、すべて自滅的な解決策から生じたものです。さらに、こうした手法は中東、アフリカ、旧ソ連圏の先行きを不透明にしています。

世界経済の将来には明治維新のような大胆な改革が必要です。世界が先進諸国の深刻な危機から脱するためには、複雑な経済活動を調整するための新しい知見を生み出せるよう「集団的知性」を復活させる必要があります。今の政治家が従来型の緊縮財政や伝統的な景気刺激策といった時代遅れの経済的知見に固執しようとするなら、過去の成功の犠牲者である破たんしたシステムから新たな経済改革へと進むことはほぼ不可能でしょう。自滅的な金融システムが実体部門の価値を破壊するのを放置してはなりません。金融業は過剰な投機的手段ではなく、ひとつのサービス産業として規制すべきです。むしろ、真の利益を得るため、ネットワークと独創的なアイデアを積み上げる「正の総和」について改めて考える必要があります。

日本は研究開発に基づく知見と技術を革新し、新しい消費と生産方法のためのイノベーションを生み出せる最高の立場にあります。私たちはアジアにおける集団的知性を開発できるよう、平和と調和のための「温かい心」と「心と心の触れ合う」関係を維持すべきです。そうして初めて、社会のイノベーションと新しい制度の構築に成功できるのです。いつの日かすべての国がアジア流に目を向け、「温かい心」に基づく関係を作ることを学び、アジアのみならず世界がひとつになることを願っています。

最後に、日本とタイの深い絆について触れたいと思います。正式な外交関係の樹立は1887年ですが、ご存じのように、17世紀初めに江戸幕府が鎖国政策をとるまで、タイには多くの日本商人和士が在留していました。タイ国民が、他国の攻撃からタイを守った偉大な武士の山田長政を忘れることはありません。両国は少なくとも数百年は続く長い関係を築いてきたと思います。タイは日本企業の進出と現地への技術移転を通じて多くのことを学んでいます。長期的な事業関係構築への取り組みは、タイの経済発展のカギとなっています。現在、タイには約7,000社の日本企業が進出し、現地と非常に良い関係を保っています。さらに、東日本大震災でもタイの洪水でも、必要なときには互いに積極的に支援しています。

「まさかのときの友は真の友」です。

ある意味、この種の親善は岡倉天心がアジアはひとつと言ったときの心情そのものでした。もちろん彼は、欧州中心の文明に対抗する東洋の美的・哲学的価値について書いていたのですが、これは扇動者がでっち上げるような抽象的な概念ではありませんでした。天心は中国とインドへの旅を通して、アジアの人々の温情を実感したに違いありません。20世紀初頭にこうした経験ができたのは天心のような一握りのエリートだけでしたが、今のグローバル時代は多くの人が空の旅を楽しみ、インターネットを通じて情報を交換し、世界はひとつ、という感覚を実際に共有できるようになりました。

今回のシンポジウムの大きなテーマは、今の世界が過去の岡倉天心の業績から教訓を学ぶことだと理解しています。私にとって彼は、アジアが今のように巨大な経済、政治、文化圏として台頭することを予見していた、先見性ある人物でした。彼は実際の歴史の道筋を予見したわけではありませんが、アジアの美意識と哲学の価値を奨励するという、より洗練された手法で予見したのです。さらに重要なことは、彼がそれを英語で行ったことでした。天心はグローバルな聴衆を念頭に置いた、きわめて有能なコミュニケーターでした。彼の業績を現代的観点から再評価することは、私たち全員にとって大きな意義があると確信しています。

ご清聴ありがとうございました。

Okakura Tenshin's Vision and Reality of the Changing World

Thanong Bidaya

First of all please accept my grateful appreciations for the invitation to this very important symposium on the contribution of Okakura Tenshin (Kakuzo) to Japan and Asia.

With the grant of Mombusho's scholarship to study in Japan, I was fortunate to have become alumni of Yokohama National University. Since the first day of my arrival in early April 1965, I vividly remembered the greeting of the sakura tree in full bloom amidst the light cold rain at Komaba Ryugakusei Kaikan. After arrival all, foreign scholarship students attended an orientation program for a few weeks. We were invited to see No play, Kabuki play and Tea ceremony but hardly understood the Japanese refinement of Asian culture. All these traditional acts looked lifeless, mechanical expressions of the body movements to me, unlike the faster, livelier traditional dances in my country.

During the following five years, pressure from formal education simply took away my interests in Japanese cultural development and just felt so much at home in westernized Tokyo and Yokohama's China town. Frankly, I preferred to join Bon Odori or went to see performance at Nichigeki theatre!

Growing up in Japan was truly a blessing for me. Coming from a relatively poor family in Thailand, I was able to learn the Japanese way of modernization that encouraged me to search for the right way for economic development of my homeland. In fact, after my doctoral education in The United States, I went back to work in Thailand and wrote a small book in Thai language on Japanese management style called 'Samurai Style Management'. By imitating Musashi's outline of 'The Book of Five Rings', I recommended that Japanese management system should be adapted for developing the appropriate method of management for Thailand.

It was only when I was invited to Yokohama National University in 2007 as a visiting professor that I had the real chance to read books on Japanese culture such as Hagakure and The Book of Tea. Hagakure made me understand Bushido or the spirit of samurai as the roots of what needed to be practiced to be a true samurai and why 'hara-kiri' has been such an honorable act for human being. I can never comment on Okakura Tenshin's knowledge on the history of arts and culture. My only admiration of his depth of Japanese cultural arts was only from my reading of 'The Book of Tea' where he could hypnotize me to witness tea ceremony with incomparable details and philosophical insights. His books on 'The Awakening of Japan' and 'The Ideals of the East' showed his depth of knowledge on the history of Asia with Japan as inseparable but most significant part of the whole. As an Asian, I felt at ease in understanding his desire to demonstrate to the western world that 'Asia is one' and could only be temporarily divided by western territorial colonization through its militaristic power. Okakura was so right to blame the western cultural influence that penetrated throughout Asia under the colonization periods.

According to Okakura, Asian cultural heritage will always reunite Asian countries if and only if we learn how to adapt western technology while preserving our cultural roots. To my opinion, the three books summarized Okakura's faith in pan-Asianism with Japan as the last inheritance of Asian cultural wealth. It is then naturally the responsibility of Japan to give back the Asian treasures that have been partly destroyed by the western influence elsewhere. The changing world according to Okakura is the modernization of Japan and then Asia with Asian style of management through appropriate refinement of western technology.

I remembered reading Arnold Toynbee's descriptive summary of the difference between the West and the East. He said the West has 'Warm head but cool heart' while the East has 'Warm heart but cool head'. I think Okakura reflected similar historical faith by emphasizing the virtue of 'Warm heart' throughout his writings. The practice of Zen Buddhism in derivative forms including Tea ceremony, No play, Ikebana, and Bushido seems to teach us to approach enlightenment through the virtue of

meditation in order to keep our hearts warm with compassion.

Meiji Ishin undoubtedly had been the most significant transformation for modernization of Japan. With determined inner spirits, Japan learned how to compete with the western world. The practice of spiritual Japanese religious belief equipped the academic scholars in all fields with strong determination to contribute to the modern economic and social development of Japan at a nation-wide scale and at such a rapid pace never seen before anywhere on earth. During this same period, we could sense the influence of the west in all other Asian countries. Most of our Asian neighbors were colonized with only a few exceptions including Japan and Thailand. Thailand was forced to open the economy and to release part of her surrounding territories in exchange for its freedom of government. With wise diplomacy, King Rama V made countless travels to European countries to build monarchic friendships with all the kings to create Thailand as the only 'neutral zone' in South East Asia. In a different approach, Japan adopted a strong protective measure to maintain her independence and significantly became the first economic power in Asia. Japanese spirits and characters had been so refined and complicate to the eyes of the westernized Asians. I am sure this symposium would be able to derive the appropriate explanation and justification of the relevance of Okakura Tenshin and his contributions for 'peace and harmony' during Meiji Ishin era.

The world had witnessed the aggressive horrors of the two world wars and the economic calamities as inevitable consequence that hurt the living conditions of all nations. Military power of the west has dominated all Asian countries and divided the world into capitalist and socialist states with extreme ideological difference. Again, Japan seemed to be the only nation in Asia that could preserve her spirit to rebuild herself and became an advanced economy within less than two decades after the end of the Second World War.

I will turn now to the recent world changes.

In the past 20 years, we have witnessed various forms of world economic volatilities including economic crisis in Latin American countries, the Asian economic crisis, and most recently, the US sub-prime crisis followed by the Euro crisis. It will be too lengthy for me to touch on these individual cases. However, I would like to mention some differences in the breakup and resolution of the Asian economic crisis and the Western economic crises.

The Asian crisis of 1997 was called 'Tom Yum Kung' crisis since it started from Thailand and spread through other ASEAN countries and South Korea. The western world criticized us for all economic mismanagements and recommended all the painful resolution measures that would certainly deteriorate the already weakened economies. I could say that only Japan showed her 'warm-hearted' leadership with full financial and economic supports. I remembered the day I came to Japan as Thailand's finance minister right after the crisis with only a Buddha statue in my hands. I was so overwhelmed with the warm hospitality during my breakfast with Prime Minister Yasuo Fukuda who was then a parliament member. We reminisced about 'Heart-to-Heart' foreign policy with ASEAN that his father, the late Prime Minister Takeo Fukuda and the late foreign minister Shintaro Abe proposed to help develop ASEAN economies. With Prime Minister Fukuda's strong commitment to support me, the afternoon meeting at the finance ministry became the most important moment of my life. I was so grateful to hear from then finance minister Hiroshi Mitsuzuka's strong commitment that it is Japan's responsibility to help Thailand to fully recover her economy and all Japanese people would understand even though the economy of Japan was still weak due to her own economic bubbles. I paid my respect and showed my gratitude by giving him the Buddha statue as a religious blessing gift. Miraculously, against disbeliefs of the western countries, most Asian countries fully recovered within less than one decade. The Japanese government, the private sector and all Japanese friends have poured in all resources to recover us from the crisis. Thailand recovered to economic normality within only six years. At present, together with emerging economies like China and India, Asia has become one of the world economic powers with the largest and most competitive production hubs. Okakura's visionary thought that 'Asia is one' may be in fact becoming a reality.

On the contrary, the 'cool-hearted' style of the advanced economies of the western world have created the worst global fundamental changes. We are now witnessing the collapse of global banking system, the deep recessions and near depressions in

most advanced economies, existential brinkmanship of Euro zone; all from self-destructive resolution measures. Besides, they have also created uncertain destinies in the Middle East, Africa and former Soviet space.

The future of the world economy now needs another brave transformation similar to Meiji Ishin. We need to revive the 'collective intelligences' to be able to generate new knowledge to coordinate complex economic activities to pull ourselves out of the depth of the crisis in advanced economies. If the current politicians are still trying to stick to the obsolete economic knowledge i.e. the traditional austerity and traditional stimulus packages, it will be almost impossible to advance to a new economic transformation from broken systems as victims of past successes. We must not let the self-destructive finance system to destroy the value out of the real sector. Finance industry has to be regulated as simply a service industry not a tool for over-speculation. Rather, we have to rethink on the positive-sums of the world of networks and creative ideas for real gains.

Japan is in the best position to transform knowledge and technology from R&D to drive innovations for new ways for consumptions and productions. We should maintain our 'warm heart' and 'heart to heart' relationship for peace and harmony, to be able to develop collective intelligence in Asia. Only then social innovation and new institutions can be successfully developed. I hope that one day all countries would turn to the Asian way to learn to develop 'warm heart' relationship so not only Asia but the world will become one.

Before concluding, I would like to touch on the deep ties between Japan and Thailand.

The formal diplomatic relationship was established in 1887, but as we all know, many Japanese traders and even samurais were present in Thailand before Japan's feudal government started the policy of Sakoku in early 17th Century. We all remembered Yamada Nagamasa as the great warrior in our army to help defend Thailand during the wars with her neighbors. I think we have had a very long lasting relationship for at least a few hundred years.

Thailand has learned so much from Japanese business settlements and transfer of technology to our country. The commitment for long-term business relationship has been the key for Thailand's economic development. At present, there are about 7,000 Japanese business firms in Thailand and we live together with perfect harmony. Moreover, we never hesitate to help each other in time of need either during the Great Tsunami in Japan or the Great flood in Thailand.

A friend in need is a friend indeed!

In a sense, this kind of fraternity was what Okakura had in mind when he said Asia was one. Of course, he was writing about the aesthetic and philosophical values of the East as opposed to the Euro-centric vision of civilization, but this was not an abstract notion concocted by a propagandist. Okakura must have actually felt the warm heart of the Asian peoples as he traveled in China and India. In the early 20th Century, this kind of experience was monopolized by a small number of elites like Okakura, but in the globalized world today, many of us can actually share this feeling of one-ness through our own air travels and information exchanges over the Internet.

I understand that the overall theme of this symposium is to learn lessons for today's world from Okakura's activities in the past. To me, he was a visionary that predicted the emergence of Asia as an economic, political and cultural power today. He may not have predicted the actual historical path, but he did so in a more sophisticated way by promoting the Asian values in aesthetics and philosophy. More importantly, he did so in English. He was an exceptionally talented communicator with a global audience in mind. Revisiting his works today will certainly benefit all of us.

Thank you very much.